

音楽科

現代高校生の音楽観

米田 潤一

【抄録】 四半世紀にわたる音楽教育を通して如何に現代の高校生の音楽に対する意識が変化して来ているか本校生徒のアンケート調査を基にしてその実態を明らかにしてみたい。

【キーワード】 音楽教育、音楽環境、クラシック

I. はじめに

現代ほどこの地球上に種々雑多のいろんな音楽が氾濫している時代は所謂音楽というものがこの世に存在するようになってからいまだかつて一度もなかった現象ではないかと思われる。やはりこれは音楽というものはその時代を如実に反映している、世相を反映していると言われるとうり人間の意識の広がり、思想の分裂傾向を表しているのかも知れない。車一つとってもそうであるようにユーザーの好みに応じてメーカーは木目細やかな対応が出来るよう種々雑多のオプションを用意しているといった時代である。一昔前なら好きな音楽と言えばクラシックか流行歌位のものであったのが今では前述のもの以外にロック、ジャズ、フュージョン、ポピュラー、ニュー・ミュージック、ソウル、演歌等々枚挙に暇がない状況である。それに付随して最近ではカラオケの流行で世の中の音楽事情はかなり急転回を見せているように思われてならない。このような状況の中で現代の高校生は音楽に対してどのような意識を持っているのか本校生徒のアンケートを基に考えてみたい。アンケートは本年(平成三年)の二月に実施したもので対象者は一年(男子11名女子34名)、二年(男子18名、女子30名)の音楽選択生93名である。

II. 音楽環境について

現在生徒の音楽的状況はどのようになっているのだろうか。各家庭に有している楽器としては男子は圧倒的にピアノが多くて男子29名中18名(62%)、次がギターと電子キーボードで15名(52%)三位はハーモニカの9名(31%)、女子もやはりピアノが断然トップで実に64名中43名(67%)電子キーボード28名(44%)という驚異的な数字で高度な音楽的環境を作り上げている。さらに近年の珍しい傾向として管楽器(吹奏楽器)の普及が著しい。女子ではフルートあるいはサクソフォンを好んで演奏する傾向にあり、男子はトランペットとかやはり女子と同じくサクソフォン等が人気

があるようである。全体でも15名(16%)の生徒が何らかの管楽器を保有している。それからもう一つ昔から地味ではあるが現在でも続けられているものにバイオリン(弦楽器)がある。93名中13名(男6、女7)実に14%もの高い数値を発見するとは意外であった。

以上は主体的なものであるが、受動的なものとして各家庭に普及しているものにステレオがあるが、これに到っては93名中71名(76%)という八割に近い勢いである。おもしろいものとして2名の生徒が家庭にカラオケ・セットが有ると答えている。こうした傾向は今後も増加することと予想されるが、これについては音楽環境が良いと判断するのかそうでないとするのかこちらとしても困惑してしまいそうである。

III. 音楽とのかかわり

前記の調査で生徒の音楽環境がかなり良好なことが判明したが、それでは実際に生徒がそれを如何に有効に利用しているのだろうか。家庭にピアノが有るといのが93名中61名(66%)と高水準を示しているが、現在でも活用しているのが男子では29名中2名しかなく女子がやや多くて21名だがこれでも男女合わせて23名(25%)で余り高価なピアノが活かされていない状況である。93名中43名(46%)と約半数近い生徒が持っている電子キーボードは男子が15名中3名、女子は28名中7名で43名中10名(23%)とこちらもピアノ同様低い活用率と言わざるを得ない。ピアノとか電子キーボードといった所謂鍵盤楽器の他にはどんな楽器と生徒達はかかわっているのだろうか。以下表に示す。

楽 器	男	女
ピ ア ノ	2人	21人
電子キーボード	3人	7人
バイオリン	3人	3人
ギ タ ー	4人	3人
ド ラ ム	2人	2人
フ ル ー ト	0人	3人

以上は楽器を媒体として各自の音楽性を表現する行為であるが、次にマス・メディア、エレクトロニクスを媒体として生徒は一日にどれくらいの時間音楽と接しているのか調査してみた。

鑑賞時間	1男	1女	2男	2女
30分以内	0人	0人	4人	4人
1時間	3人	7人	9人	8人
1時間30分	4人	1人	0人	1人
2時間	2人	5人	2人	7人
2時間30分	0人	3人	1人	0人
3時間	0人	0人	1人	3人
3時間以上	2人	18人	1人	3人

これによると1時間以内が全体の38%、1時間半から2時間が24%、2時間半から3時間が9%、3時間以上が実に全体の四分の一にあたる26%の生徒が何らかの音楽に接しているという驚異的なデータが出ているのである。

それでは次にその内容の分析に入りたいと思う。生徒が好んで聞きたいと思っている音楽はどのようなジャンルのものであるのか集計してみた。

	男子	女子
ロック	16(55%)	25(39%)
ポピュラー	2(3%)	18(28%)
クラシック	6(21%)	8(13%)
ジャズ	3(10%)	6(9%)

ご覧のとうりロックがずば抜けて多く全体の半数近い44%、クラシックは男女合わせても僅か14人で15%という低い数値である。しかしクラシックをどう思うかという質問にたいしては実に93人中82人(88%)もの生徒が「心が落ち着く」とか「素晴らしい」、「やはり音楽の原点である」といった考えを述べているのはこちらの予想とはまるっきり反対であったので驚かされた。これは従来見られなかった現象で、ある意味ではロックの頭打ち現象ではないかと考えられなくもないのではないだろうか。また本年はモーツァルト没後200年という事もあってクラシックがかなり見直されていることも大きな要因になっているのかも知れない。さらに近年顕著に地球の自然破壊が進み人間の心も徐々にではあるが獣性化して人間性が喪失してきているせいかに逆に音楽の方は自然な美しい響き、美しい調和を希求して行くような傾向にあるのかも知れない。現に最近若者達の間でもアコースティックな音楽がかなり評判になっているという一つの現状がある。

それでは実際には生徒達はどのようなミュージシャンの演奏を好んで聞いているのだろうか。これはまた予想に反して大変な結果が出て本当に驚かされたのであ

る。最初にも少し触れたように音楽の多様化が激しいということと生徒の嗜好も千差万別といった感じで、打ち上げ花火のようにいろいろな答えが返ってきたのである。ただ男子と女子とではやや嗜好に隔りがあるようなので分けて取り上げることにする。

男子の好んで聞く演奏家()内は人数

ビートルズ(6)、TMN(3)、BOØWY(3)、プリンセスプリンセス(2)、リンドバーク(2)、エリック・クラプトン(2)、以下は各一人、Mr. BIG、竹内まりや、ビーチ・ボーイズ、ジョージ・マイケル、ストリート・スライダーズ、吉幾三、氷室京介、B'z、リッチー・ブラックモアー、エルビス・プレスリー、ローリング・ストーンズ、岡村孝子、杏里、サザンオールスターズ、町田町蔵、JAGATARAH、ZIGGY、BUCK TICK、ユニコーン、RCサクセション、レブ・ビーチ、ディープ・パープル、T.スクエア、牛若丸三郎太、クボタ・トシノブ、ボン・ジョビ、エアロ・スミス、乱馬的歌劇団、日高のり子、子門真人、U2、聖飢魔II、鷹森淑乃、PPM、長渕剛、レベッカ、J. S. バッハ、エフゲニー・キーシン、ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団、NHK交響楽団、

女子が好んで聞く演奏家()内は人数

プリンセスプリンセス(14)、KAN(9)、B'z(7)、小田和正(5)、ユーミン(4)、TMN(4)、徳永英明(3)、THE FLIPPER'S GUITAR(3)、尾崎豊(3)、大江千里(2)、チャゲ&アスカ(2)、BOØWY(2)、チェッカーズ(2)、BAKU(2)、ビートルズ(2)、TUBE(2)、Dreams come true(2)、THE BOOM(2)、De+LUX(2)、今井美樹(2)、T.スクエア(2)、氷室京介(2)、杏里(2)、以下は各一人、ベイシティ・ローラーズ、M.ボストン、白鳥えみこ、S. D. P、ジョージ・マイケル、C&C Music Factory、ジッタリンジン、ステイービー・ワンダー、村松健、GUNSN'ROSES、シュープリームズ、ヨーロップ、稲垣じゅん一、エックス、東京スカパラダイス・オーケストラ、WHAM'、ストリート・キャッツ、ECHOES、ユニコーン、カシオペア、ケニー・ロギンス、浜田省吾、ポール・マッカートニー、A-HA、渡辺美里、リンドバーク、石原慎一、KATUMI、オフコース、NEW KIDS ON THE BLOCK、DEBBIE GIBSON、RAMONES、G.クレフ、STING、DOVE、HONOI ROCKS、さだまさし、聖飢魔II、ピリー・ジョエル、スタニスラフ・ブーニン、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、

とまあかくの如くでこれを見ても分かるとおりきら星の如く登場するミュージシャン、演奏家集団の中には我々音楽教師でも聞いたことのないような名前がめじろおしで如何に音楽の底辺は異常な広がりを見せて

いるかが理解出来ようというものである。ちなみに上記の中に登場しているクラシック部門の割合は僅か7%でしかない。しかしブーニンとかキーシン、あるいはモーツァルトといった名前が上がってきているということはクラシックがかなり身近になってきていることの証左ではないかと考えられる。また逆に生徒達が好んで聞いていると答えた上記のミュージシャンの中から近年は教科書に登場する作品がかなりの数に上るようになったことは、クラシックとかロックとかジャズとかといったような垣根を取り払って音楽の自由化がどんどん推進されてきているようで歓迎すべき現象である。そのように変化してきた教科書を基に展開されている現在の音楽の授業を生徒達はどのように受け止めているのであろうか。次にまとめてみた。

男子	音楽の授業が楽しい……………	19人 (66%)
	ふつう……………	2人 (7%)
	もっと豊富な内容を……………	3人 (10%)
	沢山の歌を習得したい……………	1人
	楽器を習得したい……………	1人
	テストをやめて欲しい……………	1人
女子	音楽の授業が楽しい……………	49人 (77%)
	どちらとも言えない……………	7人 (11%)
	楽器を習得したい……………	1人
	沢山の歌を習得したい……………	1人
	楽典を学習したい……………	1人
	内容が薄い……………	1人
	授業中うるさい……………	1人

「音楽の授業が楽しい」と答えている生徒は男女合わせて68名(73%)という数値で残念ながらまだ三割弱の生徒が何らかの不満を持っているということは大変重大な問題である。音楽の授業というものは文字どおり楽しくなければ意味がないものであるから生徒全員が楽しく授業を受けることが出来るように教師がもっと創意工夫をして努力していくことが肝要であると考えられる。

IV. 生徒の意識

これまで生徒の音楽に対する取り組み方、接し方をアンケート方式で側面から捉えてきたが、次に生徒の音楽に対する率直な考えを生徒の作文を通してダイレクトに認識してみたいと考え次に生徒の作文の中から代表的なものを取り上げてみた。

2年女子 Tさん

「私は音楽がとても好きです。今は、特にパガニーニのバイオリン・コンチェルトが好きです。明るい曲が好きです。リズム感がとてもあるし、私はイツァーク・パールマンの演奏したCDを持っていますが、弾

き方がとても素晴らしいです。やはり演奏者によっていろいろ変わるものだなあとと思います。私は今、バイオリンで『コレルリの主題による変奏曲』を弾いています。とても難しい曲です。弦楽の方ではモーツァルトのK. 137のディベルティメントとビバルディのチェロ・コンチェルトを練習しています。弦楽はみんなと一緒に合奏できるのでとても楽しいです。これからもいろんな曲が演奏できるように頑張りたいと思うし、もっともっと音楽に深く係わっていきたいと思います。」

2年女子 Nさん

「音楽の中で私の好きなジャンルは宗教音楽です。それは何故かということ、とても心が落ち着くからです。中でもパイプオルガンは、感動します。もちろん歌も好きです。歌の中の詩に共感してジーンときたり詩に励まされたりして自分の生き方に一番影響を与えていると思います。」

前に胸が震えると言いましたが、パイプオルガンに限らず、クラシックや合唱についても同じことが言えます。たかがドからシの中の音だけで胸が震えてしまうことが不思議でたまりません。これが音楽の虜になってしまう秘密ではないかと思っています。」

2年男子 A君

「僕の小学校時代、親しくしていた友人の中に『音楽は嫌いだ』という奴が多かった。(もちろん僕はそうではなかったが)クラスの中で音楽の好きな男なんて何人いたのだろうか。多くても5人はいなかったのではないだろうか。今の小学生がどうであるかは知らないが、だいたい音楽に対する意識は変わっていないと思う。つまり、生まれてこのかた一度も音楽に親しかなかった子供が小学校入学と同時にト音記号、四分音符etc. と音楽の専門用語を先生から連発して教えられる。だから、そんなパッパラパーの言葉を次々聞かされる音楽の授業は大嫌いになる。とまあこんなところである。そして中学卒業と同時に音楽の授業から解放され、happy happy と喜ぶ。」

私は音楽も音楽の授業も好きだが、今の日本、音楽は好きだが、授業は嫌いという学生の方が絶対に多いと思う。そしてこんな学生を生み出しているのは小学校での音楽の教え方に問題がある。」

2年男子 S君

「一昔前まで自分はロックとかヘビ・メタとかが好きで良く聞いていた。でも最近気がついたことがある。今どきのその手の音はとてつもなく複雑かつ妙である。一重にそれは最先端に行くスタジオ機材やデジタ

ル楽器のたまものであると考えるが、残念なことに響かない。心に直接届かない。目を閉じても浮かばない。はるかに自分の想像を越えてしまった。さらに彼らは曲というものを創造できなくなった。音にこだわり、技にこだわり、目先の流行を求めつづける。

そういった点から見ると、60年代、70年代の音というのは胸が熱くなる。ストレートに自分にぶつかってくる。ただ単に楽器が単純だからとか、生録だからということではなく、彼らは自身の精神により音を見つけだしたのだ。ロックというものの原点は、楽器や流行といったものではなく、彼らの心によってのみ築かれるものだと深く信じていたものである。」

1年女子 Sさん

「生まれてから一度も音楽に触れずにきた人がいるだろうか？私も御多分にもれず毎日音楽に接している。時に自分の出す音だったり家族のものだったりする。

雑音というものがある。定義づけをすれば個人の主観により不快と感じる音、とでもできようか。眉間にしわ寄せして私は家の階上の男の子のトルコ行進曲を聞く。(もっとゆっくり弾け)しかしここで考えてみれば10年前の私もこうであったではないか？彼は今新しい世界に入ろうとしている、なんでそれを温かく見てあげれないのだろうか？

音楽は時に心の薬になる。ほとんど毎日私はこれを享受してきた。けれどそれを人に与えようとはしなかった。男の子よろしく毒をふりまいてきた。それでいて他の人の行いには文句ばかりがでる。これから今まで貯めた薬をどれだけよそに出していけるかが、私の新たな課題になるだろう。」

1年女子 Mさん

「私にとって音楽というものはとても大切なものの一つです。音楽を通していろいろなことを学びました。それにいろいろな人に出会いました。こうして考えてみると音楽というものは本当に凄いものだと思います。今は音楽があるのが当たり前だけれど、もし音楽がなかったら、私は今頃どうしているのだろうかと思

議に思います。例えば友達とけんかした時、失恋した時、私は音楽を聞いて心を落ち着かせるのだけれど、もし音楽がなかったら、きっと私は困るでしょう。自分の力ではどうしていいのかわからなくなるはずで。やっぱり私にとって音楽というものは大切なものだと思つづきました。この先、日本はいつ戦争が始まるかわからないけど、どんな時でも私は音楽を続けていきたいと思っています。もしかしたらそれが世界の平和につながっていくかもしれませんから……。」

V. おわりに

今回のアンケートを実施して感じたことは、時が経ち、時代が変わり、世の中が如何に変化しようとも子供達の心というものはいつの時代も変わらないということである。音楽の持つ美しさ、優雅さ、崇高さに感動し、驚喜し、感涙する心は昔も今も少しも変わっていないのではないだろうか。ただ残念なのは一握りの心無い大人達によって音楽が商業的に利用されている面がなきにしもあらずといった感がしないでもなく、音楽が今少し本来の道から横道に逸れて来ているのではないかと危惧するものである。

しかし現代の高校生は、19世紀になって徐々に墮落の一途を辿りつつある音楽の危機を肌で感じ取り、本能的にそれを建て直して行こうという、所謂自然治癒能力のようなものを発揮しているのではないかと頼もしささえ感じた次第である。我々音楽教育に携わる者としても、ただ闇雲に若者達のクラシック離れを批判し、誹謗することに終始するのではなく、彼らの境遇、或いは心理状態を十分理解し、心の中までこちらの心を移入させて行って共に同じ感動の渦を巻き起こすことが大切ではないだろうか。そして共通の喜びと感激をわかちあって、心と心の触れ合いを持つ事が、音楽教育の場においてはとても大事なことのように思われる。今回のアンケートを通して最後に教えられたことは、教育とは、教師が生徒に知識を教えるというだけではなく、もっと重要なことは、教師が生徒という鏡を通して自分を映し出し、そして己を磨き、自らを高めていくことではないだろうか。何といても生徒は私にはない素晴らしい感受性があるのだから。